

二〇二〇年度大会の概況

初めてのオンライン開催となった二〇二〇年度大会は、十一月七日（土）、八日（日）の両日、甲南大学岡本キャンパスを会場（オンライン開催の基地局）として開催された。また二〇二〇年度大会では、「思想史の対話」研究会を大会内に組み込んで開催した。

第一日目は、「日本思想史学から見る近現代の天皇」をテーマとしてシンポジウムが開催された。

報 告

象徴天皇制への転換と定着―皇室記者・藤樫準二の言説を中心に―
（名古屋大学）河西 秀哉

戦間期コミュニストの思想／運動における日本／「天皇制」認識
（神戸大学）黒川 伊織

近代天皇制における皇后と祭祀儀礼の意義

（学習院大学）小平 美香

コメンテーター（ディスカッサント）

（神戸大学）昆野 伸幸

（東京外国語大学）米谷 匡史

司 会

（佛教大学）大谷 栄一

シンポジウム終了後に総会が行われ、評議員より二〇一九年度事業報告および決算報告がなされ、それぞれ承認された。続いて二〇二〇年度事業計画および予算案が提出され、それぞれ評議員案通り決定された。また会長から第十四回日本思想史学会奨励賞の発表が大会開催に先だって学会ウェブサイト上にて行われたこと案内があり、受賞者と作品名が紹介された。受賞業績は次の作品である。

齋藤公太 『神国』の「正統論」―「神皇正統記」受容の近世・近代―

繁田真爾 『悪』と統治の日本近代―道徳・宗教・監獄教誨―

板東洋介 『徂徠学派から国学へ―表現する人間―』

第二日目は、研究発表と第六回「思想史の対話」研究会が行われた。発表者と発表題目は以下の通りである。

〈第一部会〉

研究発表

- 1、冥界と伊勢神宮―度会常昌の高宮観を中心に―
(東北大学大学院) 馬場 秀幸
- 2、熊沢蕃山の音楽思想―『雅楽解』を中心に―
(東京藝術大学大学院) 中川 優子
- 3、近世の学習者はいかに漢文を〈書く〉能力を身につけたか―仁斎・淇園の塾における「作文」学習を中心に―
(大阪大学大学院) 張 茜
- 4、本居宣長と規範としての雅の成立―初期歌論における武の解体―
(東北大学大学院) 増田 友哉
- 5、「正法王」の出興―近代日本における釈雲照の戒律復興運動を中心に―
(東北大学大学院) 亀山 光明
- 6、近代日本における経典解釈の変容―境野黄洋を中心として―
(東北大学大学院) 呉 佩遥
- 7、近代における新修養の幕開け―仏教者・加藤咄堂を中心として―
(東北大学大学院) 山口 陽子

〈第二部会〉

研究発表

- 1、札幌農学校における文明論について
(筑波大学大学院) ロバート・クラフト
- 2、有賀長雄における「文明」論と「天皇」

(韓国海軍士官学校) 崔 民赫

- 3、明治末期から大正中中期にかけての文明論―金子筑水・樋口龍峽の考察を通して―

(学習院大学大学院) 山田 大生

- 4、福沢健全期『時事新報』社説における海軍論

(静岡県立大学) 平山 洋

- 5、梁啓超の「社会契約論」と中江兆民

(神戸大学大学院) 龍 蕾

- 6、松崎鶴雄―生涯とその学問・思想―

(茨城大学) 井澤 耕一

- 7、橘樸における「生存権」のデモクラシーと東アジア

(京都大学) 谷 雪妮

〈第三部会〉

研究発表

- 1、普通選挙法成立後の水野錬太郎の政治思想

(日本学術振興会) 西田 彰一

- 2、平泉澄とカント

(皇學館大学大学院) 谷口 太一

- 3、第二次世界大戦最終局面の思想戦―西田幾多郎と佐藤通次の論争を通じて―

(佛敎大学) 栗田 英彦

- 4、占領期神戸の女性軍属のエゴドキュメントをどう「読む」か

(神戸大学) 長 志珠絵

- 5、六〇年代のラディカリズムと革命幻想―吉本隆明の

市民社会と大衆―

(神戸大学大学院) 王

小梅

〈第六回「思想史の対話」研究会〉

対話―日本思想史と災厄―

報
告

備荒策としての郷約・教化のための郷約―大洲藩におけ

る郷約の発生と展開

(立命館大学) 殷

暁星

「兵士の死」の国際的な抑制の時代―一九世紀末から二

〇世紀初頭における軍事医療研究の国際化と日本陸軍

軍医部―

(名古屋大学大学院) 加藤

真生

災因論の手前で―津軽の巫俗を中心に日常の不幸を考え

る―

(駒澤大学) 村上

晶

「思想史の対話」研究会運営委員

石原和／上野太祐／田中友香理

新入会員(前号掲載分以降・敬称略)

氏名

所属等(専門分野)

悦の思想)

- | | | | |
|-------|---|-------|-------------------------|
| 廖 嘉祈 | 東京大学大学院(江戸後期における中国史認識) | 范 帥帥 | 東北大学大学院(鈴木大拙における心への探求) |
| 庄司 武史 | 東京都立大学(近現代思想、とくに清水幾太郎研究) | 中島 岳志 | 東京工業大学(ナシヨナリズムと宗教) |
| 平石 知久 | 関西学院大学(丸山真男の政治思想の発生史的
研究) | 加藤総一朗 | 筑波大学大学院(日本近代思想史) |
| 楊 世帆 | 東北大学大学院(江戸時代における儒学思想) | 西田 幸乃 | 筑波大学大学院(日本近代思想史) |
| 杉本 秀司 | 皇學館大学大学院(日本近世思想史) | 石井 七海 | 一橋大学大学院(近世在村社会における儒学受容) |
| 福井 優 | 立命館大学大学院(戦後思想史、吉本隆明論) | 高橋 優香 | 東京工業大学大学院(吉本隆明の詩作と思想活動) |
| ハンデンシ | 東北大学大学院(日本儒学思想史及び神道と儒
教の関係) | | |
| 小川原正道 | 慶應義塾大学(近代日本政治思想史) | | |
| 孫 傲 | 岡山大学大学院(永井荷風の孤独死について) | | |
| 呉 詩揚 | 岡山大学大学院(宮沢賢治の死生観についての
研究) | | |
| 平尾 漱太 | 大阪大学大学院(近代日本における歴史の叙述)
(白光真宏会・五井昌久の思想研究) | | |
| 吉田 尚文 | (白光真宏会・五井昌久の思想研究) | | |
| 河西 秀哉 | 名古屋大学(象徴天皇制に関する思想史) | | |
| 保泉 空 | 東北大学大学院(近代日本思想史) | | |
| 山本 祐麻 | 筑波大学大学院(日本近代思想史) | | |
| 佐々 風太 | 東京工業大学大学院(無地の食器に関する柳宗 | | |

【『日本思想史学』編集・公開規定】

- 一、日本思想史学会（以下、本学会）の学会誌は『日本思想史学』（以下、本誌）と称する。
- 二、本誌の編集には本学会の編集委員会があったる。
- 三、本誌各号の投稿論文に関する規程（「投稿規程」）は、各号ごとに編集委員会が定め、前号に掲載する。
- 四、本誌は、年に一回、毎年九月三〇日に発行する。
- 五、第五一号以降の本誌に掲載される記事の著作権は、それが掲載号発行の時点で本学会の会員資格を有する者の著作物である場合、本学会に帰属するものとする。
- 六、第五一号以降の本誌への非会員の寄稿については、編集委員会が、寄稿の際に、寄稿者から、電子公開の許諾等を得るものとする。
- 七、第五一号以降の本誌に掲載される記事は、発行翌年の一〇月一日に、本学会ホームページで電子公開する。
- 八、本誌第一〜五〇号に掲載された記事の公開許諾については、別途定める。

【投稿規程】

- 『日本思想史学』第54号掲載論文の投稿を、左記の要領にて受け付けます。
- 一、応募資格 本学会員であること。ただし第53号に論文が掲載された者は、応募資格を持たない。また、二〇二一年度（二〇二一年一〇月〜二〇二二年九月）分の会費を納めていない者の投稿は受け付けない。
 - 二、内 容 日本思想史学に関するもの。
 - 三、書式・分量 投稿論文の書式・分量は、A4判・横方向・縦書き・四〇字×三〇行・一〇・五ポイントで、注を含めて、一七枚以内とする。下部中央にページ番

号を入れること。

・注は文末注とし、本文と同じ書式とすること（行を詰めたり、ポイントを下げたりしないこと）。

・図・表等は、学会誌の判型（A5判）の用紙に印刷して、本文に添付すること（ただし、図・表等に充てる頁数に相当する文字数の分だけ本文の分量を減らすこと。学会誌の書式は、一頁あたり、二六字×二行×二段である）。

以下の①〜③を電子メールの添付ファイルで提出すること（郵送は不要）。

①投稿論文（PDFデータ）。

②八〇〇字以内の論文要旨（PDFデータ）。

③論文および投稿者情報（PDFデータ）。日本語および英語の論文タイトル、氏名およびそのローマ字表記、所属、職名、住所、メールアドレスを記載したもの。

論文採用時にはあらためてテキストデータの提出を求める。

二〇二二年二月二八日一七時。

五、投稿締切

六、送 付 先 日本思想史学会事務局 (ajihinukyoku@gmail.com)

受信後おおむね一両日中に、事務局より受信確認の返信が送られる。三月三日まで待っても返信がない場合は、メール事故の可能性が考えられるので、あらためて事務局に問い合わせること。

* 完成原稿で提出してください。なお紙媒体での投稿原稿は受理も返却もしません。

* 論文の審査と採否決定には、編集委員会があたります。

* 本誌に掲載された論文等の著作権は、本会に属します。

【編集後記】

本号には、二〇二〇年度大会シンポジウムの「特集」、第六回「思想史の対話」研究会にもとづく「特別掲載」のほか、「提言」「投稿論文」「書評」を掲載しました。

「投稿論文」の総投稿数は二二本（古代一本・中世二本、近世八本、近現代一本）で、そのうち五本を掲載いたしました。二〇二〇年度大会は初のオンライン開催となり、二日目の研究発表の発表者には、事前に原稿を用意していただいた上で報告していただきましたが、その成果を投稿された方が多かつたようので、総投稿数は例年にない多さとなりました。反面、書式、会費納入などの面で投稿規程に違反している原稿は三本と少なく、近年では減少傾向が続いております。とはいえ、次号に投稿なさる会員は、ぜひ投稿規程や編集・公開規定を確認の上でお願いいたします。とくに投稿規程におきまして、提出物と投稿締切について、大幅な変更が生じております。ご注意ください。

「書評」で取り上げる対象は、二〇二〇年四月から二〇二一年二月の間に刊行された会員の著作から選びました。依頼した方々の多くが締切を守り原稿を提出して下さいました。深く御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染の拡大は続き、一向に収束の気配がありません。これまで以上の混乱のなか、無事に本誌の刊行に至りましたのは、印刷所をはじめ、関係各位のご協力の賜物かと思えます。篤く御礼申し上げます。

編集委員長が右往左往する中、委員各位がしっかり支えてくださいました。今後もよりよい編集を進めていきたいと思います。（K）